

# 「総選挙狂騒曲」を振り返って

「言葉が多すぎます」。聖マザー・テレサの言葉である。これに次いで「ただ私たちが何をしているのかを見てくだされば結構です」という「言葉」が続く。彼女の行為を誉めそやす賛辞ではなく、彼女が求めてきたありのままを見てほしいと言っているのであろう。

聖人の金言とは裏腹に、この12日間の選挙期間中に溢れるほどの言葉がたれ流された。放たれた言葉の多くが「過去に政治が何をし

## 不安とした「ぼんやり」への強多弱

山梨県立大前学長 伊藤 洋



「来たか？」を知るに十分ではなかったこと、また、「なるほどこれからそうしてもらえば私たちは安心だ」と納得できる言葉であったかと言えはささか心もとない。

そもそも今次の総選挙、淵源をたどれば「森友・加計学園問題」に端を発し、これに対して起死回生の内閣総辞職による人心一新を画したにもかかわらず、か

えって臨時国会を乗り切るに自信を持てなくなった総理大臣が「座して死を待つ」に耐えかねた解散というのが真実に近かっただろう。まして北朝鮮のミサイルが、日本列島上空を飛翔して内閣支持率に復調の兆しが見えたのを先途として「国難解散」としたのも牽強付会と言っべきであった。

ところがここにかねて都議会選挙で進境著しい都民ファーストの会のカリスマ的指導者小池百合子東京都知事が「希望の党」を引っ提げて登場したことが、この選挙を一気に変質させて

しまった。紛れもなくポピュリズム型政治を露呈したのが今次の総選挙の一切であった。日替わりで主人公が変わる舞台、まさに劇場国家ニッポンを彷彿させた12日間であった。その「騒ぎ」を象徴するように最後が台風襲来で低投票率に終わった「選挙狂騒曲」というのが、筆者の偽らざる評価である。

他方山梨選挙区に目を転ずれば、2区における堀内詔子氏と長崎幸太郎氏の自民党公認争い、「無所属で立候補し、勝った方を追加公認する」というまるで獅子の子落としのような裁定から壮絶な戦いが始まった。しかもこの問題は自民党本部の岸田文雄政調会長と二階俊博幹事長という大物同士の角逐でもあったから、もはや政策を争う選挙とは程遠い代理戦争に墮してしまっただけでなく、その選挙区は、そもそも歴史的な保守二大派閥の争いが絶えなかった地域だったが、その角逐が時を越え今日まで続いたのである。この政治文化がこの

上また次代につながるのかどうか、敗れた長崎氏の去就が注目される。

他方、山梨1区は、開票が終盤までもつれ陣営はさぞやヤキモキしたことであろうが、選挙はこれといった政治的論争の場とはならず中身は低調に終始した。その低調の結果としてこれは事実上解散前議席そのままに終えた。

山梨選挙区として決算すれば、選挙区定員2議席に対して与党3に無所属1の合計4人を送り出したことになる。無所属を選んだ中島氏が、衆院与野党勢力の中でどのような政治的立ち位置を取るかは不明だが、今次の選挙が総体として80万県民の正しい選択だったか否か、これが「自公300議席超、安倍政権継続」という見出しの躍る向こう原則4年の政治に託されることとなった。台風は去ったが、一強多弱政治の始まり。これこそが筆者の「唯ぼんやりとした不安」(芥川龍之介)の源となっている。

（寄稿）